

1 文（文章）で解答する設問の答案については、次のA項の加点要素の合計から次のB項・C項の減点要素の合計を引いた得点をその設問の得点とします。ただし最低点は0点としマイナスの得点はつけません。

A

- a 以下の採点基準では、模範解答をいくつかの要素に分割し加点要素とします。答案中にその加点要素に相当する部分があれば、その加点要素に配点された得点を与えます。
- b ある加点要素は、その加点要素に配点された得点か0点で採点することを原則とします。たとえば5点配点された加点要素であれば5点か0点で採点することを原則とします。ただし、その加点要素中の部分点を認める場合もあります。その場合それぞれの採点基準の中に明記されています。
- c ある要素に加点するかが、他の要素と無関係に決まる場合と、他の要素との関係で決まる場合があります。前者の場合は、その要素を単独採点（独立採点）すると言いその旨必ず明記されています。後者の場合は、他の要素との関係について以下の採点基準で具体的に指示されています。

解答通りという条件がある場合はいかなる部分点も認めません。

B

- a 答案中に大きな誤読と判定される内容（語句）などがある場合は、その内容（語句）を減点要素として示されている場合もあります。
- b 加点要素でも減点要素でもない部分もありえます。その部分は加点も減点もしません。

C

次に該当するものは、答案の形式上の不備として、一箇所につき1点の減点要素とします。

- a 誤字。漢字などの文字の明らかな誤りは誤字とします。
 - b 脱字。
 - c 文末の句点の脱落。
 - * 字数指定のない場合、句点の脱落は誤字とし1点の減点とします。
 - d その他不適切と判断せざるをえない箇所。
 - e 不適切な文末処理。設問の問い方に対応していない形で答案の文末を結んでいない場合は、適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備による減点要素とします。たとえば「…とはどういうことか？」という問いに体言で結んでいないものなどは適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備とします。また、理由が問われているのに、「から」「ので」などで結んでいないものなども適切な文末処理が行われていないと見て形式上の不備と見ます。
- また文末の表現を問わない場合もありますが、その場合はその都度明記されています。

2 日本語の表現として不適切なものは程度に応じて減点します。

3 次の各項に該当するものは、部分点の要素があっても、その設問の得点を0点とします。

- a 答案が解答欄の欄外にはみ出しているもの。
- b 一行の解答欄に二行以上書いた場合もその設問の得点を0点とします。
- c 字数指定のある設問で、字数をオーバーしたものの。
- d 答案の文章が最後まで完結していないもの。

4 古文あるいは漢文の訳を記述する設問の場合も以上に準じますが、文末の句点や文末の処理あるいは答案の完結にこだわらなくともよい場合はその都度明記されています。

□（評論） 採点基準

問一 各2点 合計10点

- (a) 誇大 (b) 歓呼 (c) 媒介 (d) 摩擦 (e) 元凶

問二 10点

A 3点

（模範解答例）集団の中に潜在する指導者に統率されたいというある種の緊張を含んだ渴望により、集団催

B 3点

C 2点

D 2点

眠と同質の状態へと導かれた人々が、暗示による無意識の思考を共有することで、恐るべき狂
気じみた集団に転化するというもの。

★ まとめるべき内容は明確。本文から取り出した要素をいかに的確にまとめられているかをしっかりと吟味する。

X AがBを導く、AがBのような状況を生み出す原因・理由であることが読み取り難い答えは全体としてマイナス2点とする。

A 本文中にある「一人の首領によって統率された群れ方」と「集団の中に潜在する指導者へのある種、緊張を含んだ渴望」をまとめたもの。「指導者（首領）」「ある種」という語はなくても可。「集団の中に潜在する」という要素は、同等の意味内容が答案に含まれていると判断できればよい。その場合「潜在する」は「存在する・ある」というような言い方でも可。「緊張を含んだ」がなければマイナス1点。

B 本文の「『群集』の置かれた状態は、暗示による集団催眠と同質のものだ」に対応する。答案中で「集団催眠」という語が正しく使われていれば3点与えてよい。

C 本文の「集団は決して思考しないわけではなく、暗示による無意識の思考をおこなっている」に対応する。「共有」という言い方はなくても可。

D 本文の「恐るべき狂気じみた集団の光景へと転化してしまう」に対応する。「転化する」は単に「なる」といった言い方になっていても可。

問三
10点

A 2点

B 2点

C 2点

(模範解答例) 分散して存在する人々がメディアの発信するモノローグを模倣するうちに、一つの精神的共

D 2点

E 2点

同体が生成し、意見が共有されることでそれが正しいものと見なされ、そこに巨大な同質の人

間の集合体が形作られるということ。

★ 傍線部を含む段落を的確に要約できているかどうかを吟味する。

X Bの内容が示されていても、Bが以下の内容を導くということが読み取りがたい答えはマイナス2点とする。

A 「同質性の集合体」になる以前の人間のあり方を示すもの。本文に「あちこちに分散しながら」とある。

B 本文の「新聞やラジオのモノローグを人々が模倣するという『模倣の法則』」という箇所をまとめたもの。「メディア」とまとめて示したが「新聞やラジオ」のままでも可。「模倣」は「まねする」「同調する」「共有する」など同等の意味であれば可。

C 「精神的共同体」という語は必須。「生成し」は同等のことが述べられていれば許容。

D 本文の「意見が同じであることによってその意見の正しさが証明されたことになる」に対応する。「意見(考え)が共有されるだけで、何の根拠もなくそれが正しいと見なされてしまう」という内容が読み取れるなら2点与えてよい。

E 本文の「形作られた巨大な同質性の集合体」に対応し、傍線部の結果として顕在化するものを示している。「人間が複製されてゆく」結果であるから、「同質性」をもつ「集合体」が「形作られ」るのは当然のこと。

問四 各2点

- ①Ⅱエ ②Ⅱア ③Ⅱイ

A① 2点

A② 2点

(模範解答例) 個々の人間自身はその意味を自覚していないにもかかわらず、半ば自らの意思を伴いつつ

B 2点

C 2点

D 4点

行っている習慣という非合理的な知恵が社会的に共有され集積されていくなかで、他人もそ

E 2点

の慣習を規範として生きているはずだという思い込みが人間の内に生じ、その結果あいまいな

実体としての大衆というものが出現し成立するということ。

★ 「大衆」の成立、出現に関するオルテガの考えの要約である。

A 本文にある「慣習のもつあやふやな本性」についての説明。

① 本文には「それ(＝慣習)を行なうことの意味をわれわれ自身も誰も知ってははいない」とあり、それを簡潔に示したもの。ほぼ同内容と判断できれば加点してよい。曖昧・不明瞭と見なされる場合は1点だけ与える。

② 本文の「半ば自らの意思をもって行なう」をほぼそのまま利用したもの。ほぼ同内容と判断できれば加点してよい。曖昧・不明瞭と見なされる場合は1点だけ与える。

* 解答例では①と②が「にもかかわらず」で逆説的に対置されているが、「くまま」「くつつ」などで並列的に示されていてもよい。

B 本文に「慣習という非合理的な知恵」と明確に示されている。答案中で正しく使用されていれば2点与えてよい。

C 本文の「『社会的なるもの』の本質は慣習である」「慣習こそが『社会的なるもの』の正体であり」に対応する。答案中のどこかに「慣習」が「社会的」なものであるという説明があればよい。

D これとほぼ対応するような説明は本文中にはない。この説明は、例えば「人は全く未知でもなく全くの既知でもない『他の人びとというあいまいな実体』の中で暮らすがゆえにこそお互いの行為を手探りで規範化する」、「本来お互いに何のかかわりもないはずの『それぞれの生』をいきがかり上齟齬せぬよう、かろうじてつじつまを合わせる便法」、「『慣習』があつてはじめてわれわれは、見も知らぬ他人の行為を予見でき」といった本文の記述から導かれたものである。そのことを採点者もしっかり念頭に置いて、ほぼ同等の説明ができていると判断できれば4点与えてよい。

E 本文の「『他の人びとというあいまいな実体』の中で暮らす」という記述による。「あいまいな実体」が「大衆」であるという読解ができているかどうかを問うたもの。それができていると判断できる答案に2点与える。

問一 各2点 合計10点

(a) けいもう (b) いけい (c) はんしん (d) げだつ (e) ゆいしき

問二 13点

A 3点

B① 2点

(模範解答例) 絶対的で無限なものを求める精神的な本性を持つ人間が、現実社会の様々な矛盾に直面して

B② 2点

C 2点

D 2点

自己の生と世界に対する根本的な疑念を抱き、自己の自由な理性に基づいた 抽象的な思考能

E 2点

力によってその普遍性を探究すること。

★ ヘーゲルの規定した「哲学」の本質的な在り方を本文から読み取ってまとめたもの。本文冒頭から傍線部を含む段落までにその説明がある。A～Fの要素の並び方は、解答例通りでなくてもよい。

A 「哲学的思考」を始める人間の本性の提示。本文の「『無限』で『絶対的なもの』に引かれる人間精神の本性」に対応する。「絶対的で無限なものを求める」に相当する内容がなければ0点。「精神的(な本性)」を欠いている場合はマイナス1点。

B 本文の「現実社会のさまざまな矛盾に直面した『精神』は、この分裂の意識を乗り越えようとして」、また「人間の精神は自分と世界のあり方を考え尽くそうとする」という説明に対応している。

①は哲学的思考の始まりとなる具体的契機、②はその思考の中身を説明している。

②の後半の「根本的な疑念を抱き」については、そのままの言い方は本文中にない。本文の記述に従って「考え尽くそうとして」などとなっても許容してよい。

* C・D・Eはヘーゲルが哲学的思考の条件として提示した三つのものである。本文には「一つは、抽象的な思考能力。もう一つは、すでに挙げた『普遍性』の思考。そして二つめが、自由な意識(個の意識)の成立」とある。

C 本文中には「自由な意識(個の意識)」とあるが、別の箇所に「『純粹透見』(自己の理性をあくまで信じようとする知のあり方)」とあることから、ここでの「意識」は「理性」であるという読解が可能である。「自由な意識」という表現をそのまま使用している場合には、答案中のどこかに哲学的思考は人間の理性による営みであることが示されていれば、それと併せて2点与えてよい。示されておらずに「自由な意識」という語句だけ使っている場合には1点とする。

D 「抽象的な思考能力によって」の有無によって採点する。

E ここは本文の「『普遍性』の思考」をそのまま使ってもよい。

問三 13点

A 3点

B 3点

(模範解答例) 厄災や苦難に満ちた人間世界の理由や意味を人知を超えたものへの怖れや畏敬の念に基づい

C 1点

D 1点

E 2点

F 3点

て説明する 宗教の物語は、内容の真偽よりも、共同体の成員が苦しい生に耐えて 結束と安定

を実現することこそ意味があるから。

★ A・B・Cが「世界説明としての物語」の説明、E・Fがその機能・役割の説明、Dは対比を明確にするためにある。

A 「物語」の説明の対象を簡潔にまとめたもの。傍線部を含む段落の一つ前の段落に「厄災や苦しみがもたらされる理由と意味」とある。「人間世界の」といった記述がなくても許容。

B 「物語」が依拠する観念の説明。本文の「人知を超えたものへの怖れや畏敬の念において、宗教や神話という形で現した」に対応する。「人知を超えたものへの怖れ、畏敬の念」という説明は必須。これがなければ0点。

C 「宗教」という語が必須。「宗教の物語」という表現が答案中のどこかにあればよい。答案の文脈の中で正しく使われているかどうかの吟味は必要。

D 傍線部後半の繰り返しではあるが、この傍線部自体が「哲学」との対比を前提としているわけであるから、そのことを答案に示すのは当然のこととなる。この通りの言い方でなくても、「哲学」との対比が意識されていることが答案から読み取れば加点してよい。

E Aに引いたところのくりかえしになるが、本文に「厄災や苦しみがもたらされる理由と意味が与えられなければならないという生に耐えられない」とあり、そこを利用した説明である。

F 本文の「共同体のさらなる結束と安定につながる」という記述をほぼそのまま答案に示したもの。「(共同体の) 結束と安定」という説明は答案に必須。「結束」か「安定」のいずれか一つしか使われていない場合はマイナス1点。

* E・Fのいずれにも「共同体」という語がない場合はマイナス1点とする。

* 理由説明答案の形になっていない場合はマイナス1点。

A 3点

B① 2点

B② 2点

(模範解答例)

世界には共同体を超越した 唯一の秩序とそれを捉える絶対的な観点が存在するとするのが

C 3点

D① 2点

思考の絶対普遍主義であるのに対し、文化の枠組みを超えて共有しうる 抽象概念を用いて

D② 2点

世界説明を試みるのが普遍的思考である。

★ 何と何との対比であるかが不明瞭な答案は、マイナス2点とする。

A 「共同体を超越した」がなく「世界」という語のみが使われている場合は1点とする。

B 「思考の絶対普遍主義」の説明。①を捉える視点が②であることが的確に説明されているなら、Bとして4点与える。①と②が単に並列されているだけなら、Bとして3点とする。

① 「唯一の」「ただ一つの」「単一の」・「一つの」など可) がなければ1点。

② 「絶対的(な)」がなければ1点。

C 本文の「抽象概念は」「一定の文化の発達をみたところでは必ず存在するから、どこでも使用可能なのである」に基づく説明。「発達した文化ならどこにでも存在する」あるいは「文化が異なっても理解可能な」というような説明でもよい。この「文化」が「共同体」となっている場合は2点とする。

D 本文の「物語を用いず抽象概念を用いて世界説明を行うという『ルール』」に対応する。①・②が正しく示されているなら、Dとして4点与える。

① 必須の要素。なければD①0点。

② 必須の要素。なければD②0点。

問一 (a) 傍線部を現代語訳しなさい。 【4点】

〔該当傍線部〕 A1やがてB2内に参らせたまはむとC1いそがせたまふ。

〔模範解答〕 A1すぐにB2(姫君を) 入内おさせになろうとC1準備をなさる。

〔ポイント〕

A【1点】やがて ↓ すぐに

※「そのまま」でもよしとする。

B【2点】内に参らせたまはむと ↓ (姫君を) 入内おさせになろうと

※「姫君を」の有無は不問。

※「入内する」＋「使役(〜させる)」＋「尊敬(お〜になる・〜なさる)」＋「意志(〜しよう)」が全てできていて【2点】。

「入内する」ができていない場合は×。

「入内する」ができていて、残り三つのポイントの内、一つ間違えていると【1点】。二つ以上間違えていると【0点】。

※「入内する」は、「天皇に嫁入りする・天皇と結婚する」など、天皇と結婚する意味があればよしとする。

「参内する・宮中へ参上する・天皇のもとへ行く・宮中に入れる・内に入れる」などは×。

C【1点】いそがせたまふ。 ↓ 準備をなさる。

※「準備をする」＋「尊敬(お〜になる・〜なさる)」が全てできていて【1点】。いずれか一つでも間違えると【0点】。

※「準備をする」は「支度をする・用意をする」でもよい。

問一 (b) 傍線部を現代語訳しなさい。 【4点】

〔該当傍線部〕 A1かたち、B1心をばC2さらにもいはず、
〔模範解答〕 A1容貌や、B1人柄はC2言うまでもなく、

〔ポイント〕

A 【1点】かたち、 ↓ 容貌や、

※ 「容貌」は「顔立ち・容姿」などでもよい。

※ 「や」はなくてもよい。

B 【1点】心をば ↓ 人柄は

※ 「人柄」は「性格・性質」などでもよい。「心・気持ち」などは×。

C 【2点】さらにもいはず、 ↓ 言うまでもなく、

※ 「言うまでもない」という言い切りになっている場合は 【1点】。

※ 「さらに」打消(全く「ナイ」)のパターンではないので「全く言わない」などは×。
「全く」言うまでもなくは 【1点】とする。

問一 (c) 傍線部を現代語訳しなさい。 【4点】

〔該当傍線部〕 A1上のB1むげにねび、C2ものの心知らせたまへれば、

〔模範解答〕 A1帝がB1たいそう大人びていて、C2物事の分別がおありなので、

〔ポイント〕

A 【1点】上の ↓ ねび、 ↓ 帝が ↓ 大人びていて、

※ 「帝が」と「大人びていて」の両方ができて 【1点】。二つのポイントの内、一つ間違えていると 【0点】。

※ 「帝」は「天皇・一条天皇」でもよい。「上」のままは×。

※ 「大人びていて」は「大人っぽくて・大人らしく」などでもよい

B 【1点】むげに ↓ たいそう

※ 「非常に・とても」などでもよい。「ひどく」などマイナスイメージの表現は×。

C 【2点】ものの心知らせたまへれば、 ↓ 物事の分別がおありなので、

※ 「物事の」の有無は不問。

※ 「分別がある」+「尊敬(お)になる・うなざる」+「原因・理由()ので・()から・()ため」が
全てできていて 【2点】。

「分別がある」ができていない場合は×。

「分別がある」ができていて、残り二つのポイントの内、一つ間違えていると 【1点】。二つ間違えていると 【0点】。

※ 「分別がある」は「道理をわかまえている」など、またはこれらに相当する内容の表現でもよい。
「心を知る」・「人の気持ちが分かる・思いやりがある」・「情趣を解する」などは×。

問二(A) 和歌(A)について、比喻表現を踏まえて現代語訳しなさい。【6点】

〔該当和歌〕 A1紫の雲とぞ見ゆる藤の花 B3いかなる宿の C2しるしなるらむ
〔模範解答〕 A1縁起がよい紫色の雲のように見える藤の花は、 B3どれほどめでたい道長様の C2吉兆であるのだろうか。

〔ポイント〕

A【1点】紫の雲とぞ見ゆる藤の花 ↓ 縁起がよい紫色の雲のように見える藤の花は、

※「縁起がよい」の有無は不問。

※「紫の雲に（紫の雲のように・紫の雲と）」＋「見える」＋「藤の花は」が全てできていて【1点】。

B【3点】いかなる宿の ↓ どれほどめでたい道長様の

※「どれほどの家の・どういう家の」は【1点】。

※「藤原家（道長家・道長）」が明らかな、「どれほどの藤原家（道長家・道長）の・どういう藤原家（道長家・道長）の」は【2点】。

※「藤原家（道長家・道長）」と「めでたい（すばらしい・立派な・栄える等）」が明らかな、「どれほどめでたい藤原家（道長家・道長）の」は【3点】。

※「宿」が「宿」のままになっている場合は×。

C【2点】しるしなるらむ ↓ 吉兆であるのだろうか

※「吉兆・よい兆し」＋「推量（〜だろう）」が全てできていて【2点】。

「断定（〜である）」と「疑問（か）」の有無は不問。

※「吉兆・よい兆し」はあるが、推量がない場合は【1点】。

※「吉兆・よい兆し」が「前兆・予兆・兆し」となっている、「前兆・兆し」＋「推量」は【1点】。

推量がない場合は×。

※ただし、Aができていて、Aに「紫の雲」の形容として「縁起がよい」がある場合に限り、「前兆・予兆・兆し」＋「推量」でも【2点】とする。

この状態で、推量がない場合は【1点】。

問二(B) 和歌(B)について、比喻表現を踏まえて現代語訳しなさい。 【6点】

「該当和歌」 A2ひな鶴を養ひたてて B2松が枝の蔭に C2住ませむことをしぞ思ふ
「模範解答」 A2(めでたい) 鶴のひなのような姫君を養い育てて、 B2(永遠に栄える) 松の枝のよ
うな帝のもとに C2(いつまでも) 住まわせたいという心が思われる。

「ポイント」

A【2点】ひな鶴を養ひたてて ↓ めでたい鶴のひなのような姫君を養い育てて、
※「めでたい」の有無は不問。

※「鶴のひなのような姫君を育てて」の意があれば【2点】。

※「鶴のひなのような」がない「姫君を育てて」は【1点】。

※「姫君を育てて」がない「鶴のひなを育てて」は×。

B【2点】松が枝の蔭に ↓ 永遠に栄える松の枝のような帝のもとに

※「永遠に栄える」の有無は不問。

※「松の枝のような帝のもとに」の意があれば【2点】。

※「松の枝のような」がない「帝のもとに」は【1点】。

※「帝のもとに」がない「松の枝の蔭に」は×。

B【2点】松が枝の蔭に住ませむことをしぞ思ふ ↓ いつまでも住まわせたいという心が思われる。

※「いつまでも」の有無は不問。

※「住まわせたい(住ませよう)と思う」、または「住まわせたい(住ませよう)ということ(心・道長・
道長の心)を思う」の意があれば【2点】。

※「住まわせたい」は「住ませよう」でもよい。これがない場合は×。

※「住まわせたい(住ませよう)」ができているが、「と思う・ということ(心・道長・道長の心)を思
う」ができていない場合は【1点】。

問三 傍線部はどのようなことを述べているのか、具体的な例をあげつつ、わかりやすく説明しなさい。【8点】

「該当傍線部」 これはやがてこのたびの童女の名ども、院人、内人、殿人などやうにつけ集めさせたまへり

「模範解答」 A1入内に際しB1姫君のもとに仕えることになったC3童女たちは、D3女院のもとから差し出された者が院人と呼ばれたように、(C)どこから差し出されたか、その出身の場所によって呼び名がついたということ。

「ポイント」

A【1点】入内に際し

※Cが0点の場合は得点できない。

※Cの「童女」の形容として「入内に際しての」の意があればよい。

※「入内」は、「天皇に嫁入りする・天皇と結婚する」など、天皇と結婚する意味があればよしとする。「参内する・宮中へ参上する・天皇のもとへ行く・宮中に入る・内に入る」などは×。

B【1点】姫君のもとに仕えることになった

※Cが0点の場合は得点できない。

※Cの「童女」の形容として「姫君のもとに仕える」があればよい。

C【3点】童女たちは、どこから差し出されたか、その出身の場所によって呼び名がついたということ。

※「童女(少女・女の童)はどこから差し出されたか(出身・出自)で呼び名がついた」の意があれば【3点】。

※「童女(少女・女の童)は」という主語がないが、「どこから差し出されたか(出身・出自)で呼び名がついた」の意がある場合は【1点】。

※「どこから差し出されたか(出身・出自)で呼び名がついた」の意がない場合は×。

D【3点】女院のもとから差し出された者が院人と呼ばれたように、

※Cが0点の場合は得点できない。

※「女院のもとから差し出された(来た)者(童女・少女・女の童)が院人と呼ばれた」が例としてあがっていればよい。

※例は「天皇のもとから差し出された者が内人と呼ばれた」、または「殿(道長)のもとから差し出された者が殿人と呼ばれた」でもよしとする。

※「院人、内人、殿人」のいずれか、もしくは複数を上げているだけの場合は【1点】。

問四 傍線部について、誰のことを言っているのかわかるように現代語訳しなさい。

【9点】

「該当傍線部」 A1見たてまつり、B1仕うまつる人々も、C2あまり若くおはしますを、D1いかにものの栄えなくやE1など思ひきこえさせしかど、F1あさましきまでG2おとなびさせたまへり。

「模範解答」 A1姫君をお世話し、B1お仕えする人々も、C2姫君があまりに若くていらつしやるのを、D1どれほど華やかさがなく見栄えもないことだろうかE1などと想像し申し上げていたけれど、G2姫君はF1おどろくほどまでに(G)大人びていらつしやった。

「ポイント」

A【1点】見たてまつり、 ↓ 姫君をお世話し、

※対象が「姫君」と分らない場合は×。

※「世話する・面倒を見る」の意が読み取れない「拝見する・見申し上げる」などは×。

※謙譲表現になっていない「世話し」は×。

B【1点】仕うまつる人々も、 ↓ (姫君を) お仕えする人々も、

※対象が「姫君」と分らない場合は×。

※謙譲表現になっていない「仕える人々も」は×。

C【2点】あまり若くおはしますを、 ↓ 姫君があまりに若くていらつしやるのを、

※「あまりに(たいそう・とても等)」+「若い」+「尊敬」+「のを(ので)」が全てできていて【1点】。

「のを」は「」ので・」から・」ため」でもよい。

※右の意がある上で、主語「姫君」が書いてあれば【2点】。

D【1点】いかにものの栄えなくや ↓ どれほど華やかさがなく見栄えもないことだろうか

※「どれほど」+「華やか(見栄え)」+「打消」+「ことか(だろうか)」が全てできて【1点】。

※「華やか(見栄え)」は「栄え・見栄」などでは×。

E【1点】など思ひきこえさせしかど、 ↓ などと想像し申し上げていたけれど、

※「などと(と・など)」+「思う(想像する)」+「謙譲」+「過去」+「逆接」が全てできて【1点】。

※「想像し」は「思い」、またはこれらに相当する表現でもよい。

※謙譲表現になっていない場合は×。

F【1点】あさましきまで ↓ おどろくほど

※Gが0点の場合は得点できない。

※「意外にも・あきれるほど」でもよい。「とても・たいそう」などは×。

G【2点】おとなびさせたまへり。 ↓ 姫君は」大人びていらつしやった。

※「姫君」+「大人びている(大人っぽい・大人らしい)」+「尊敬」が全てできて【2点】。

「大人びている(大人っぽい)」ができていない場合は×。

「大人びている(大人っぽい)」ができていて、残り二つのポイントの内、一つ間違えていると【1点】。

二つ間違えていると【0点】。

問五 傍線部について、「昔の人」との違いがわかるように言葉を補って現代語訳しなさい。 【9点】

「該当傍線部」 [A1・B1・C1・D1] E1このころの人は、F1うたてG1情けなきまで (E) 着重ねても、H1なほこそはI1風邪なども起こるめれ。

「模範解答」 A1昔の人は、襲の数も少なく、B1入っている綿も薄い衣を着て、C1自分の家であれ、D1めでたい席であれ、過ごしていたものだが、E1近頃の人は、F1嫌になるくらいにG1風情も損なわれるほどまで (E) 衣を重ね着して、それでもH1やはりI1風邪などをひくようである。

「ポイント」

※AとDは「昔の人」に関する補い。

A【1点】 (補い) ↓ 昔の人は、襲の数も少なく、

※「昔の人は、襲の数が少ない」の意があればよい。

「襲の数が少ない」は「着ている服の数が少ない」でもよい。「服の数が少ない・服が少ない」は×。

B【1点】 (補い) ↓ (昔の人は) 入っている綿も薄い衣を着て、

※「昔の人の衣は薄い」の意があればよい。

C【1点】 (補い) ↓ 自分の家であれ、 (過ごしていたものだが、)

※AもBも×の場合は得点できない。

※「自分の家で過ごしていた」の意があればよい。

D【1点】 (補い) ↓ めでたい席であれ、過ごしていたものだが、

※AもBも×の場合は得点できない。

※「めでたい席で (場・時) 過ごしていた」の意があればよい。

※EとIは、傍線生の訳。

E【1点】このころの人は、(着重ねても、) 近頃の人は、(衣を重ね着して、それでも)

※「近頃の人は重ね着しても」の意があればよい。「重ね着」の意がない場合は×。

※「近頃の人は」は「最近の人は・近頃は・最近は」などでもよしとする。

F【1点】うたて ↓ 嫌になるくらいに

※Eが×の場合は得点できない。

※「不快なほど・異様に・異常に・ひどく」などでもよい。「ますます」は×。

G【1点】情けなきまで ↓ 風情も損なわれるほどまで

※Eが×の場合は得点できない。

※「無風流に・趣もなく・情けないほどに・嘆かわしいほどに・あきれるほどに」などでもよい。

H【1点】なほこそは ↓ やはり

※Iが×の場合は得点できない。

※「やはり」以外は×。

I【1点】風邪なども起こるめれ。 ↓ 風邪などをひくようである。

※「風邪をひく」＋「推定（ようだ）」が全てできていて【1点】。